

若者言葉「うける」の新用法と主体化

尾谷 昌則

1. はじめに

次の発話には、ある共通点を持つ言葉が含まれている。
どんな共通点が考えられるだろうか。

- (1) 大将、おあいそね!
- (2) ハンバーガー1つ、お持ち帰りです。
- (3) 昨日、駅前で1000円だけ募金してきた。
- (4) MHEのOBをブレイ中。結構面白くなってきたかも。
少し課金¹しそうな俺ガイル (Twitter: @fez_kanisawa)

2007年7月2日

「おあいそ」というのは、寿司屋などで最後に勘定をたのむ際に、客がよく発話するものである。しかし、この言葉は、勘定書きを示す際に店の方から「お愛想がなくて申

し訳ありませんが」などと申し添えていたことに由来するものであり、それが明治あたりから客の側が使用するようになったと言われている(『暮らしのことば 新語源辞典』講談社、2008年、p.149)。「お持ち帰り」というのは、本来であれば店が客に対して「店内でお召し上がりになりますか。それともお持ち帰りになりますか」と問う際の接客表現であるため美化語の「お」が付されているのだが、いつのまにか客の側も「お」をつけたまま使用するようになってしまった。「募金」は「金を募る」と書くが、いつのまにか金を支払う側も自らの行為を「募金する」と言うようになった。最後の「課金」も、サービスを提供している側が、利用客に対して使用料金を課することを表すものだが、2007年頃からは、客が料金を支払うことも「課金する」というようになった。

このように、その言葉の使用者とは反対側の立場の人間が、その言葉を使用するようになるという現象が少なからず見られるわけであるが、近年、この仲間に「うける」が加わった。「うける」という動詞は、例えば「先生が質問を受ける」のように、目的語をとる他動詞用法が基本であるが、(5)のような自動詞用法も近世に生まれている(『日本国語大辞典』第2版)。これらは、芝居などの芸能関係者が、いわゆる楽屋言葉(中田1978)として使い始めたものとされているが、現在では一般にも浸透している。しかし、近年では(6)のように拡張した用法が見られる。

(5) a. 最後のオチが、観客にウケた。

b. 最後のオチで、観客がウケた。

(6) a. 何それ。超ウケる。

b. 春樹が茶髪とか、マジウケるわ。

(5) aは「(客から)好評を得る、気に入られる」の意、(5) bはある対象を「(客が)気に入る」の意であり、楽屋言葉として演者の側が使用しはじめ、それが一般にも使用されるようになったものである。しかし、近年見られる(6)は「自分が笑える／面白いと思う」の意であり、演者の側から見れば観客にあたる者が使用していることになる。本稿では、便宜上、(5)のように自分以外を主語にとる自動詞用法を旧用法、(6)のように自分の感情もしくは内的状態を表す自動詞用法を新用法と呼んで区別する。

この新用法は、全世代に浸透しているとはいえない。例

えば小柴(2014)は、「観客側(相手)が「うける」というと(中略)どうも違和感があります」と述べている。また、『イラストでよくわかる 敬語の使い方』(彩図社、2015年)では、「おもしろい、笑える」という意味で使われることが多い若者ことば。軽薄でおちゃらけた印象を与えてしまうので、しっかりとした言葉に言い換えた方が無難」(p.20)とも指摘されている。

一方で、金田一(2012)は、言葉遣いの善し悪しは別にして、冷静に次のように分析している。

(7) 「あのギャグはウケなかった」「今日はウケなかった」など通常はバラエティーやコメディの作り手や、それを批評する側の人が使う言葉であるが、昨今の「ウケる」は、視聴する側が批判的な視点も同時に表現することになり、自分のことが自分のことではないような言い方に聞こえ、私というものを自分として捉えずに、離人症的でバーチャルなものとして捉えている。(金田一2012:215)

この後半部分は、自分が面白いと思ったこと(＝自分の内的状態)を客観的に捉えているかのような表現になっているという指摘であるが、これは認知言語学(Langacker 1987, 1990, 1991, 1999、中村・上原2016)で頻繁に議論されている主観性(subjectivity)の問題にも直結するものであり、非常に興味深い指摘である。この点について議論することが本稿の最終目的であるが、その前に、新用法

と旧用法の意味の違いについても考えたい。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、新用法について指摘した書籍や辞書などの記述を参考に、新用法の意味が特殊化したものであることを論じる。第3節では、Langacker(1987, 1990, 1991, 1999)のいう主体化(subjectification)を紹介し、これが新用法にも見られることを論じる。第4節では、小説やネット掲示板から収集した初期の使用例に基づいて、「うける」の主体化について裏付けを行う。また、新用法は表記上の差別化が進んだことも明らかにする。

2. 新用法の意味の特殊性

管見の限りでは、この新用法の発生に関する本格的な研究は見あたらない。新用法に触れている文献で最も古いものは『若者遊びコトバ事典』(双葉社、1996年)で、高校生を中心に使用される「もううける」が次のように立項されている。

(8) もううける【高校生】 すごく面白いこと。

(『若者遊びコトバ事典』 p.148)

次に古いものは、大学生の言葉遣いを集めた『現代キャンパスことば辞典』(吉備人出版、2002年)であるが、「うける」が立項されているわけではなく、他のキャンパスことばを説明する際の会話例(三か所)に登場しているの

みである。うち二例を引用する。

(9) a. 「女がシャネルで、男がジープにへろへろのトレーナーかー。ウけるなー、あれ」

(『現代キャンパスことば辞典』 p.71)

b. 「しかもロゴが魚！かなりウけるー」

(同書、p.225)

これらの会話例では、話者がある事態について触れてから、その事態に対して自分の「うける」という感情を語っている。それゆえ、これらは明らかに新用法であると判断できるが、意味の記述がない。

手元にある辞書で確認すると、『日本国語大辞典』(第2版、第2巻、2001年)をはじめ、『広辞苑』(第7版、2018年)、『新明解国語辞典』(第7版、2014年)、『明鏡国語辞典』(第2版、2010年)、『岩波国語辞典』(第8版、2019年)などの最新版には旧用法しか記載されておらず、新用法についての記載が見られるのは三冊のみであった。そのうち、『大辞林』(第4版、2019年)では、「その話、超うけるんだけど」という新用法の例文が掲載されているものの、語釈は記載されていなかった。

残る二冊のうち、一冊は、新語に強いとされる『三省堂国語辞典』(第7版、2014年)で、自動詞用法の2番目に新用法への言及がある。

(10) ②おもしろがられる。「ギャグが受ける」「(じょうだんなどに反応して)受ける!」「おもしろい!」

ただし、ここに挙げられた例文の「ギャグが受ける」と「受ける！」は、用法上、大きな違いがある。前者は、ギャグが第三者に好意的に受け入れられたことを客観的に描写しており、本稿が旧用法と呼ぶものである。一方で、後者は自分がその場で抱いた感情について、まるで感情形容詞で表現するように述べているものであり、まさに本稿が新用法と呼ぶものである。このように、旧用法と新用法が同じ項目になっているため、新用法に関する説明が十分とは言えない。

最後は、若者言葉やネット用語を積極的に取り入れたことで話題となった『三省堂現代新国語辞典』第6版、2019年である。同書には語釈しか記載されていないものの、旧用法の①や②とは区別して新用法の③が記述されている。(11)〈自動下〉①人気・好評を得る。「大衆に―」

②おもしろがられる。「ギャグが―」

③おもしろくて笑える。「若い世代の言い方」

また、新用法について、旧用法の「おもしろがられる」から一步踏み込んで、「笑える」と記述している点も見逃せない。旧用法は、単に「人気・好評をえる」「おもしろがられる」というだけであり、具体的にどんな行動に結びついたのかまでは限定していない。例えば、有名なテレビドラマ「半沢直樹」は視聴者にうけたといつてよいだろうが、この場合の「うけた」が具体的に視聴者のどのような

感情に結びついているのかまでは限定できない。「倍返しだ！」と怒鳴るシーンにハラハラしたり、国税庁に飛ばされた黒崎が最後に登場する胸アツ展開に心を躍らせたり、会社の再建に向けて社員が一丸となって努力するシーンに涙したり、最後に政治家の悪事が露見して胸がスカッとしたりと、様々な感情による〈好評〉があり得る。それらが統合されて「うける」という一語に表現されているのである。

しかし、新用法の「うける」は、基本的に「(滑稽で)笑える」という場合に用いられるものであり、旧用法よりかなり限定された意味になっている。そのことは、次のような発話が「(滑稽で)笑える」という解釈以外では不自然になってしまうことから分かる。

(12) 涙のラストシーン、超うける。

似たような記述として、(11)の②には「おもしろがられる」との語釈もあるが、「おもしろい」というのも決して一枚岩ではない。「ギャグがおもしろい」と言えば、それは「笑える」ということに直結するが、学生が「哲学がおもしろい」と言っても、それは哲学が興味深いというだけであり、哲学で笑うということにはならない。つまり「おもしろい」は、〈笑える〉も含めて広く〈他者の興味・関心を惹きつける〉という意味を表している。

となれば、③の「おもしろくて笑える」という説明は、〈笑える〉という感情に限定している点で、一步踏み込んだ

だ記述といえよう。このように、もともとの意味が限定され、指示対象が狭くなる現象は意味の特殊化(specialization)と呼ばれ、古くから意味変化の代表的なパターンとして指摘されている(Paul 1880, Waldron 1967, Lyons 1977, McMahon 1994)。例えば、英語の *meat* はもともと「食物」を表していたが、同じ意味の *food* がフランス語から流入したことで、意味が特殊化して「肉」だけを指す語になった。日本語でも、「つま」はもともと夫婦や恋人が互いに相手を呼ぶ言葉、つまり男女どちらも指していたのだが、現代では婚姻関係を結んだ女性の方のみを指す語へと特殊化している。若者を中心に定着している「リア充」も、元々は現実(リアル)の世界での生活が充実していないネット民が、現実世界の生活が充実している者のことを(半ば自分たちへの自虐の意味を込めて)そう呼び始めたのだが、これが一般の若者にも伝わり、「恋人がい(て生活が充実している者)」という意味へと特殊化してしまった。中高生などは、仕事をしている社会人とは異なり、生活における恋愛の比重が相対的に大きいためか、より限定された意味へと変化したものと考えられる。

「うける」の意味が〈笑える〉という感情もしくは心的経験に特殊化したことについては、(12)だけでなく、ネットの書き込みを見ても伺える。ネット上のコミュニケーションは顔が見えないためか、自分が笑っていることを示す「(笑)」や、「げらげら」のようなオノマトペと一緒に

使用している例がよく見られる。つぎの例は、インターネット上の掲示板としては草分け的な存在である「2ちゃんねる」の中でも、初期の書き込みのものである。²⁾

(13) a. >34 大爆笑。ウケた。

b. >1 むっちゃウケた(爆笑)
(過去ログ 936473445 1999/10/25)

c. >9 げらげら。ウケた。
(過去ログ 94368582 1999/11/28)

意味の特殊化が起こった原因については、お笑い芸人のことばがマスメディアを通じて一般に定着したことなく無関係ではないと思われる。例えば、テレビドラマ「半沢直樹」の製作スタッフが「視聴者にうける」と発話しても、先にも指摘したように、実際に「どのようにうける」のかは限定されない。しかし、お笑い芸人が「客にうける」と言えば、それは「客が笑う」という具体的な行動に限定されるだろう。お笑い芸人はテレビ番組に頻繁に登場するため一般人も耳にする機会が多く、その影響力も大きい(陣内2005、松本2010)。それ以外の影響があった可能性を排除するわけではないが、少なくとも、新用法の意味が〈笑える〉に特殊化されて一般に定着した原因の一つに、お笑い芸人やその関係者の影響があったとみて差し支えないだろう。

3. 新用法と主体化

Langacker(1987, 1990, 1991, 1999)は、認知主体の主体的な捉え(subjective construal)が言語表現に色濃く反映されてゆく現象を主体化(subjectification)と呼んでいる。例えば、Langacker(1990: 17, 20)が挙げたつぎの例文を見てほしい(日本語訳は筆者による)。

- (14) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica.
(バネッサがテーブルをはさんでベロニカの向かい側に座っている。)

- b. Vanessa is sitting across the table from me.
(バネッサがテーブルをはさんで私の向かい側に座っている。)

- c. Vanessa is sitting across the table.

何かを横切って移動することを表す英語の前置詞 *across* は、実際には移動が存在していない(14) a のような場合にも使用できる。この文は、ベロニカ(とテーブル)の位置を参照点にして、バネッサの位置を認知していることを表しており、この3つの例文の中では最も客体的な捉えを反映している。一方、(14) b は、*from me* という前置詞句によってバネッサを同定する参照点が話者自身になった例であるが、これは、例えば自分とバネッサの2人が写っている写

真を見ながら説明しているような状況である。参照点が自分自身になって点でやや主體的な捉えを反映していると言えるが、認知主体としての自分が写真の中の自分を客体的に捉えているため、(14) a と大差はない。しかし(14) c は、認知主体である自分自身が事態の中に身を置き、その自分を参照点にして(＝自分の視点から)バネッサの位置を認知している。このように、認知主体が認知対象であるはずの状況(Langacker 1990 は「オンステージ」と呼んでいる)の中に身を置き、その視点から事態を把握するというのは、非常に主体性が高いといえる。以上のように、より客体的な捉えを反映した表現から、より主體的な捉えを反映した表現へと変化することを、Langacker は主体化と呼んでいる。次の図1(a)～(c)は、(14)の3つの文に反映されている認知構造を图示したものである。

図(a)は、認知主体であるグラウンド(G)が、ある人物を参照点(R)として利用することで、バネッサの位置を認知していることを表している。認知する事態の中で最も際立つて認知されるトラジエクター(TE)はバネッサであり、右側の円で描かれている。バネッサを位置づけるためのランドマーク(LM)となる机は長方形で描かれている。バネッサの位置を把握するための参照点(R)、つまりバネッサの向かいに座っている人物からバネッサ(TE)に伸びる矢印は、*across* が元々持っていた(移動)を意味するのだが、(14) a では物理的な移動の意は失われているため、実線ではな

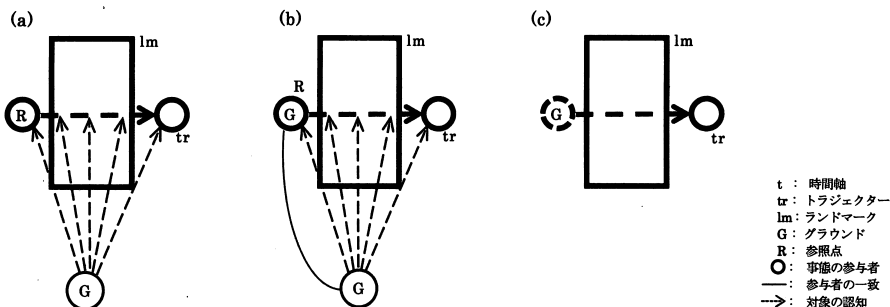


図 1 主体化
(a)(c) は Langacker (1990:18)、(b) は上原 (2016:68)

く破線で示されている。図(b)は、(14) bの認知構造を表している。基本的には図(a)と同じであるが、参照点が写真に写った認知主体自身であるため、事態を認知する主体と参照点になっている自分とが線で結ばれ、同一人物になっていることが表されている。一方、図(c)は事態を外側から客体的に認知していたグラウンド(＝認知主体)が、事態の中に入り込み、自身を参照点にしてバネッサの位置を認知していること

を表している。これを演劇に喩えるなら、舞台上で起こっている事態を観客席から冷静に認知していた状態から、自分もステージ上にのぼり、その事態に埋め込まれた視点から事態を認知している状態へと移行したのだと言えよう。Langackerは、このようにグラウンド自らが事態内の参照点になり、より主体的な捉えを言語が反映するようになる現象を主体化と呼んでいる。

Uehara(1998, 2006)は、Langackerの考えを踏襲しつつ、そこにGibson(1950, 1979)のエコロジカル・セルフ(環境に埋め込まれた自己)の観点を取り入れて、図2のように図示している。そして、このような主体性の違いは、(15)のような日本語の内的状態述語表現とそれに対応する英語表現にも見られるとしている。

(15) a. I love you. (図2(a)に対応)

b. あなたが好きです。 (図2(b)に対応)

さらに、上原(2005:540)では、(14)にある3つの文に反映される主体性の違いが、日本語の内的状態述語「欲しい」がとる3種の構文にも平行して見られることを指摘している。

(16) a. 太郎は 酒が欲しいようだ。 (例文(14) aと平行)

b. 私は 酒が欲しい。 (例文(14) bと平行)

c. 酒が欲しい。 (例文(14) cと平行)

ここでのa文は、認知主体の客体的な事態把握を反映している。b文は、把握している対象が認知主体自身であると

いう点でa文よりやや主体的な把握になっているが、「私は」という主題を用いることで、認知主体であるはずの自分を認知対象として表現しており、ある程度客体的に捉えていることを表している。しかしc文は自分自身を客体化しておらず、自身の内的状態についてより主体的な捉えがなされていることを表している。

さて、以上の議論を「うける」の旧用法と新用法の違いにあてはめてみよう。旧用法は、観客が笑うなどしている事態を、誰かが客体的に認知したことを述べるものであり、図3(a)のように表すことができる。勿論、ステージに立っている演者自身が、笑う観客を見てそう言うこともできるが、その場合は、観客が笑う様子を客体的に認知しているものと考えられる。その意味では、主体化ではなくむしろ客体化(objectification)と言ってよいだろう。

一方で、認知主体自身が笑ったことを表す新用法の「超うける!」などは、事態の中にいる認知主体が自己の内的状態について述べたものである。ゆえに、これを図示すると図3(b)のようになる。

ただし、新用法については逆の見方も可能である。(7)に引用した金田一(2012)が指摘しているように、私というものを自分として捉えず、もう一人の私であるかのよう捉えていると考えるわけである。この考えに従うなら、図3(a)で示した演者の客体化と同じように、自己の内的状態を客体的に認知しているのではないかということにな

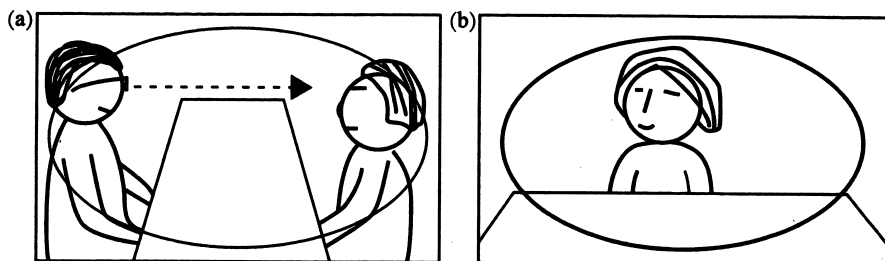


図2 それぞれの表現の表す見え (Uehara (1998, 2006) より)

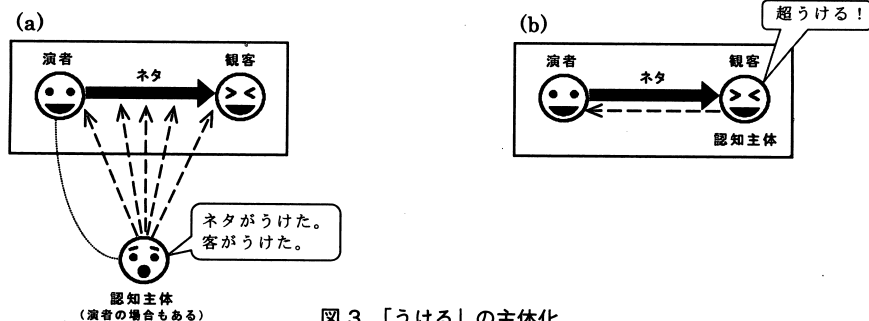


図3 「うける」の主体化

る。そこで次節では、書籍やネット掲示板から収集した用例をもとに、新用法発生の背後にあるものが主体化／客体化のいずれなのかについて考えてみたい。

4. 用例の調査から見たもの

4. 1. 書籍から採取した用例と主体化

「うける」の主体化がどのように起こったのかを分析するためには、当然、その新用法が発生した当時の用例を調査する必要がある。しかし、2000年以前の口語データはそれほど多くない。念のため、日本語歴史コーパス(CHJ)、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)、文藝春秋アーカイブズ(1923～1950年)なども調べたが、2000年以前の使用例はヒットしなかった。

そこで、筆者が独自にスキヤンした小説や対談本(計145冊、1955年～2001年に出版されたもの)で調査した。その結果、新用法の用例が3つ見つかった。そのうち最も古い用例は、意外なことに1969年であった。

(17) ママ「ううん、笑ってなんかいいわよ」

私「笑ってるじゃないか」

ママ「ちがうの。なんていったらいいかな。ウケたのよ。坊や、感動してるのよ」

〔麻雀放浪記(二) 青春篇〕角川文庫、1979年、p. 67、初出は『週刊大衆』1969年)

この発話は、主人公の若者が仕事を辞めてしまったことを母親に知られたくないあまり嘘をついてしまう場面を見て、クラブのママ(といっても20代後半)が思わず笑ってしまい、その言い訳をする場面である。ここでは「笑った」ではなく「感動した」という意味で使用されているため、意味の上ではむしろ旧用法ということになる。また、自分が笑った事に対して解説を加えているかのような語り口は、自身を客体的に捉えているとも言えるため、図3(b)には当てはまらない。しかし、うけた主体が他者ではなく発話者自身であるという点では、新用法でもある。これは、旧用法と新用法の架け橋になるような用例であり、図1(b)に相当すると解釈すべきであろう。

2つ目の例は、1993年のものである。これは小説の「あとがき」で、作者が読者からもらったプレゼントについて語ったものである。

(18) あと、高坂にテストイモの三色セットをくださった方もいました。「最近、艶やかな赤い唇」がでなくて淋しいので」だそうです。ウケました。

〔炎の蜃気楼10 わだつみの楊貴妃(前編)〕集英社、

1993年、あとがき

この用例は、「(私は) 笑いました」という意の新用法と見て間違いない。ただし、「ウケました。」としか書かれていないため、旧用法として解釈しようと思えば出来なくもない。その場合は、「(あなたのコメントは) (私に) ウケま

した。」ということになるが、これは自分自身を客体的に捉えるような事態認知であり、日本語として自然に選択される構文ではない。いずれの場合にせよ、この表現の主体性の度合いを判断するなら、先の例と同じく図1(b)に相当すると解釈すべきであろう。このように、新旧いずれの解釈も可能な例というものは、言語変化の過渡期に頻繁に出現するとされている。およそ言語変化というものは、突然変異でいきなり新種が出現するものではなく、時間をかけて徐々に進むものだからである。この例も、その一つである可能性は高い。

さて、最後の例であるが、こちらは1994年のものであった。

(19)「ホント、あれでマジで警部補だったらウケるな」

(『いきなりミスター密輸船』集英社、

1994年、p.45)

こちらはル形で使用されている点が面白い。過去に実際に起こった笑いであれば、既に事態が成立しているわけであるから、たとえ笑った主体が自分自身であっても、その当時の自分と現在の自分を分化させ、客体的に捉える事が容易になる。しかし、未来に自分が笑うことを想像している(19)のような例では、現在の自分を基準にして未来の自分を想像するしかないため、両者を完全に切り離すのは容易ではなく、むしろ両者が融合した視点を取らざるをえない。その意味では、ル形を使用している(19)は、タ

形を使用している(17)や(18)よりも、主体化が進んだ事例であると考えられる。山本(2016)は小説の地の文を調査し、タ形が語り手の外的視点構成を表しているのに対し、ル形は語り手の内的視点構成を反映していることを指摘しているが、これは本論の議論とも矛盾しない。

以上の3つの用例から、面白い仮説を導くことができる。それは、新用法が(17)や(18)のようにタ形を用いて客体的に事態を認知したことを表すものとして生まれ、その後、より主体的に事態を認知したことを表す(19)のようなル形表現が発生した(つまり主体化した)のではないかという仮説である。この仮説は、(7)で紹介した金田一(2012)の指摘に反論するものになる。否、新用法が生まれたきっかけは、客観的な捉えをやや残したタ形の「うけた」であって、その点では(7)の指摘と合致する。しかし、そこで用法の拡張がストップしたわけではなく、その後、より主体的な捉えを反映したル形の「うける」が発生してきたということであり、この点は(7)では触れられていないものである。勿論、書籍から収集できたわずかな3例の変化に基づいた仮説であるため、極めて脆弱と言わざるをえない。そこで、これを検証すべく、より多くの用例採取が期待できるネット掲示板を調査して、用法の変遷を追った。

4. 2. タ形からル形へ

調査に使用したのは、インターネット上の掲示板サイト

としては草分け的な存在で、1999年5月からサービスを開始している「2ちゃんねる」である。当該サイトの過去ログにあるスレッド(≡掲示板¹⁰⁾)のうち、最も古い1999年に立てられたスレッドと、その5年後と10年後にあたる2004年と2009年に立てられたスレッドの書き込みを出来るだけ多く収集、テキストデータ化した上で、KWIC Finderを用いて「受ける／うける／ウケる／ウケル」という4種の表記およびそのタ形で検索した。収集できたスレッド数、テキストファイル化した際のデータ量、新旧それぞれの用法のヒット件数は表1の通りである。また、その11年間ににおける新用法と旧用法の使用頻度の推移を割合でグラフ化したものが図4である。ネット掲示板という特性もあるだろうが、新用法の使用割合が年々増えているのがよく分かる。

このうち、1999年と2004年のスレッドで得られた新用法について、さらに詳しく見ていこう。得られた用例はそれぞれ26件と204件であり、テンズ(時制)と表記別にその内訳を示したものが表2である。

表記の違いはいったん無視して、まずは前節で提示した仮説を検証するため、ル形とタ形という大きな対立で見ておこう。表2における1999年と2004年の両者の使用数を合算したものが表3であり、それを当該年度の使用割合としてグラフ化したものが図5である。

細かな表記の違いは捨象して全体的に見ると、ル形の使

	1999年	2004年	2009年
スレッド数	2225	7791	3996
データ量	27MB	474MB	289MB
旧用法数	48	232	60
新用法数	26	204	759

表1 収集したデータ

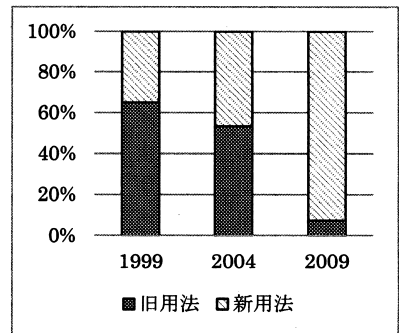


図4 新・旧用法の使用割合

用割合が増加していることが分かる。つまり、新用法は(17)や(18)のように、過去に起こった事態を客体的に捉える用法として発生し、その後、自分が現在抱えている感情(≡内的状態)について語るル形の用法が徐々に増加していったというのである。このことは、主体化が進行したことを意味しており、前節で提示した仮説が正しいことを裏付けるものである。

ただし、図3には若干の修正が必要になる。用例の変遷を見ると、笑う主体が自分自身である新用法は、最初は(13)や(17)(18)のようなタ形で生まれた可能性が高い。これらは、自分自身の内的状態について述べている点では、旧用法よりも主体的

	ル形				タ形				計
	受ける	うける	ウケる	ウケル	受けた	うけた	ウケた	ウケタ	
1999年	1	1	1	0	3	10	9	1	26
2004年	0	3	44	38	0	3	83	33	204

表 2 新用法の内訳

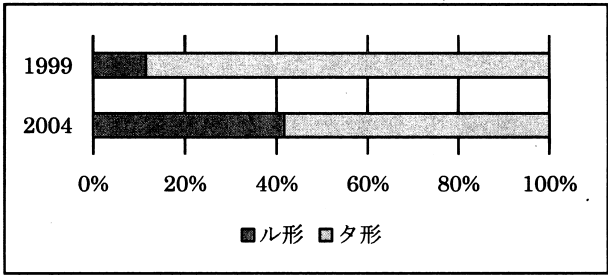


図 5 ル形とタ形の使用割合

	1999 年	2004 年
ル形	3	85
タ形	23	119

表 3 新用法のテンス

ではあるのだが、タ形を使用して過去の事態として認知している点では、客体的な捉え方をしているとも考えらる。つまり、笑う主体が認知主体になったという点で、若干の主体化が進行したことになるが、ル形による新用法は、笑う主体が（いま・ここ）を共有する事態内において、そこから自身の内的状態について語っているものであるため、より主体化が進んだ用法であると考えられる。そこで、図 3（b）で提示していた新用法を、図 6 の（b）と（c）の 2 つに分けることにする。

この修正を加えたことで、結果的に、上原（2005：540）が（16）において指摘した主体性の 3 段階と同じものが出来上がった。逆に言えば、「うける」は Uehara（1998, 2006）や上原（2001, 2005）のいう内的状態述語の用法を獲得したと言えることもできるだろう。ル形で内的状態を表す述語（もしくは慣用句）には、他にも「むかつく」「腹立つ！」などがあるが、これらも主体化した用法という点では同じものと考えられる。

さて、最後に、表記で細分化し、さらに詳しく見てみよう。表記別に新用法の使用割合をまとめたものが図 7 である。

まずはル形の内訳を見る。図 5 で見たように、ル形の使用割合は増加しているが、漢字表記の「受ける」とひらがな表記の「うける」は減少しており、実際に増加したのは、カタカナ表記の「ウケる」（図中では斜線の帯）と「ウケル」

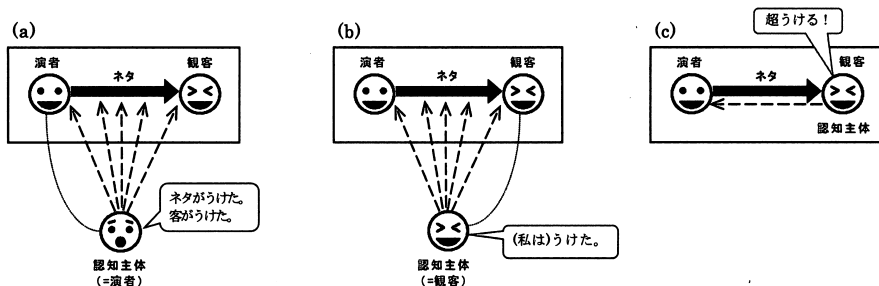


図6 「うける」の主体化（修正版）

（図中では黒い帯）のみである。特に後者は、1999年には0件であったのが、2004年には新用法全体の20%近くを占めるまで躍進しており、「ウケる」と「ウケル」を合わせると、全体の40%を占めるまでになっている。

つぎはタ形の内訳について見てみよう。図5でも見たように、タ形の使用割合は減っているのだが、実際に減少しているのは非カタカナ表記の「受けた」と「うけた」だけである。両者を併せると、1999年では新用法全体の約50%を占めていたのだが、2004年には2%未満にまで激減している。しかし、カタカナ表記の「ウケた」

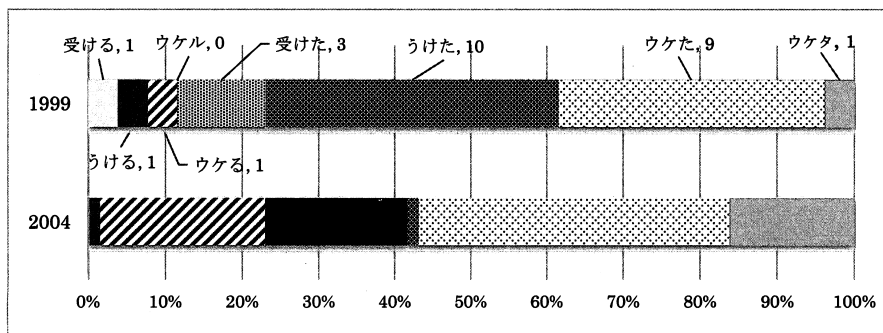


図7 「うける」の表記とテンス

は微増しており、全てがカタカナ表記の「ウケた」に至っては約4倍に増加している。

以上から分かることは、「うける」の新用法はカタカナ表記が進んでいるということである。則松・堀尾(2006)は、〈人間活動—精神および行為〉を表す言葉において常用漢字のカタカナ表記化が著しいことを指摘しており、その中には旧用法の「うける」も含まれているが、新用法の「うける」についても同様のことが確認できた。旧用法から新用法が生まれたわけである

から、同じ表記になるのは当然かもしれないが、少なくとも1999年の段階では、カタカナ表記の総使用数は全体の5割未満であったわけであるから、最初からカタカナ表記に偏っていたとは言いい切れない。

5. おわりに

本稿では、ウケルの新用法について議論してきた。第2節では、この新用法を若者言葉の一種として紹介している書籍や、辞書の記述を手がかりに、新用法の意味について議論し、〈好評を得る〉という漠然としたものから〈笑える〉という限定された意味へと特殊化したことについて論じた。第3節では、新用法の発生(特に「超うける」)のようなル形での使用)には、Langackerのいう主体化が関与していることを指摘した。第4節では、書籍やネット掲示板から新用法の初期の用例を収集し、その特徴に基づいて、より客体的な捉えを表すタ形の「うけた」から、より主体的な捉えを反映したル形の「うける」が発生した(つまり、主体化した)ことを論じた。また、ネット掲示板での表記に着目し、その使用割合の変化が観察できたことから、新用法の「うける」は、意味が特殊化しただけでなく、表記の上でも変化が起こったことが確認できた。

参考文献

- Gibson, J. J. 1950. *The Perception of the Visual World*. Boston: Houghton Mifflin.
- Gibson, J. J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin. (古崎敬ほか共訳『生態学的視覚論』1985年、サイエンス社)
- 池上嘉彦 2000. 『日本語論』への招待』東京：講談社。
- Iwasaki, Shoichi 1993. *Subjectivity in Grammar and Discourse: Theoretical Considerations and a Case of Japanese Spoken Discourse*. Philadelphia, Pa: John Benjamins.
- 陣内正敬 2005. 「関西方言の広がり」と日本語のポストモダン」陣内正敬・友定賢治(編)『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』321-330. 東京：和泉書院。
- 金田一秀穂 2012. 『オツな日本語』東京：日本文芸社。
- 久野暉 1978. 『談話の文法』東京：大修館書店。
- 小柴皐月 2014. 『一流のふるまい』日本語編 美しい言葉えらび入門』東京：インプレス。
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1990. "Subcategorization," *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive

Linguistic Research 14) Berlin / New York: Mouton de Gruyter.

Lyons, J. 1977. *Semantics. Vol. I*. Cambridge: Cambridge University Press.

松本 修 2010. 『お笑う』日本語革命』東京: 新潮社.

松下大三郎 1928. 『改撰標準日本文法』東京: 中文館書店.

McMahon, April M. S. 1994. *Understanding Language Change*.

Cambridge: CUP.

中田昌秀 1978. 『笑解 現代笑屋』湯川書房.

則松智子・堀尾香代子 2006. 「若者雑誌における常用漢字のカタカナ表記化——意味分析の視点から——」『北九州市立大学文学部紀要』72: 19-32. 北九州市立大学文学部.

Paul, H. 1880. *Prinzipien der Sprachgeschichte*. Tübingen: Niemeyer.

(Strong, H. A. 1888. *Principles of the History of Language*. London: Swan Sonnenschein, Lowrey & Co.)

Uehara, S. 1998. "Subjective predicates in Japanese: A Cognitive Approach." Paper presented at the Research Issues for Cognitive Linguistics Workshop at the Australian Linguistics Institute in July 1988. (Published in June Luchjenbroers (ed.), *Cognitive linguistics investigation across language, fields, and philosophical boundaries*, 271-291. Amsterdam: John Benjamins)

Uehara, Satoshi 2006. "Internal State Predicate in Japanese: A Cognitive Approach." *Cognitive Linguistics Investigations across Language, Fields and Philosophical Boundaries*, (ed.) June Luchjenbroers, 271-291. John Benjamins, Amsterdam/

Philadelphia.

上原 聡 2001. 「言語の主観性に関する認知類型論的一考察」『日本認知言語学会論文集』1, 1-11. 日本認知言語学会.

上原 聡 2005. 「Subjective Construal と文法構造と言語類型と: 日本語の内的状態述語をめぐって」『日本認知言語学会論文集』5, 531-546. 日本認知言語学会.

上原 聡 2016. 「ラネカールの subjectivity 理論における「主体性」と「主観性」——言語類型論の観点から——」中村芳久・上原聡(編著)『ラネカールの(間) 主観性とその展開』53-89. 東京: 研究社.

Waldron, R. A. 1967. *Sense and sense development*. London: André Deutsch.

山本雅子 2016. 「語りの語用論」『認知語用論』くろしお出版.

注

(1) ダウンロードしてプレイするゲームなどは、無料版でもそういった遊べるものもあるが、さらに進んだステージでプレイしたり、様々な追加アイテムを入手するためには、料金を支払う(課金に依る)必要がある。

(2) 2017年10月1日からは「5ちゃんねる」という名称に変更されている。書き込みの冒頭に「34」とあるのは、34番目の書き込みをした人に向けたリプライ(返信)であることを表している。

(3) 1996年の『若者遊びコトバ事典』に採録されているのが最も古い記述なので、新用法が広まったのは90年代前半と見

られる。そこに影響を及ぼしたお笑い芸人となると、80年代後半から90年代にかけてメディアを席巻した「お笑い第三世代」(とんねるず、ダウンタウン、ウッチャンナンチャンなど)であろう。例えば、とんねるずは(自ら作った言葉ではないが)「〜みたいナ」「ツーショット」「元サヤ」などを番組で使用し、一気に流行させた。ダウンタウンも、ギャグが面白くなかった時に言う「寒い」や「すべる」をはじめ、「ヘタレ」などの表現を浸透させており、その影響力は非常に大きい。あまり知られていないかもしれないが、ダウンタウンがMCを務める『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで!』(日本テレビ、1989年)や『ダウンタウンDX』(読売テレビ、1993年)などは、現在でも放送が続いており、かなりの長寿番組になっている。

(4) 〈好評を博する／喜ばれる〉という抽象的な意味と比較すると、〈笑える〉という意味はその具体例に当たるとも考えられるので、ここで起こった意味の特殊化は、堤囃(シネクドキ)に基づく拡張であるとも言える。

(5) 認知の対象となる客体が実際に移動していなくても、認知主体である発話者が、客体の位置を移動に基づいて主体的に捉えている場合は、*arrows* が使用できる。このように、客体的な把握が背景化し、主体による「主体的な捉え(subjective construal)」が前面に出ることも Langacker (1990, 1991) は主體化と呼んでいる。

(6) Langacker (1990:18) の図(v)には、認知主体などを統合した

グラウンド(G)と参照点(R)を結ぶ点線は描かれていない。しかし、この文では両者が同じ対象を指しているため、上原(2016)は両者を点線で結んだ図を提示している。本稿でもこちらの図を採用した。

(7) 「グラウンド」とは、認知主体である人間だけでなく事態を把握する際の土台となる「いま・ここ」も含めた幅広い概念であるが、本論文の議論に関しては、単純に認知主体(もしくは発話者)を指すと考えても差し支えない。

(8) 出来事の内側から事態を把握するような表現方法は、日本語の特性の一つとしてよく指摘されている。例えば川端康成の『雪国』の冒頭にある「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」という一文は、列車の中にいる主人公がその場で体験していることをそのまま表現しているような印象を与えるが、英語では「The train came out of the long tunnel into the snow country.」などと訳され、まるで列車の動きを外から眺めているかのような表現がなされる(池上2000:291)。同様の例としては、自分が部屋に入った直後に認知した状況を説明する「太ったおばさんがいたの。」とその英語訳の「Then I saw a big lady standing there.」にも言える(Iwasaki 1993:80)。また、授受を表す動詞の中でも、日本語は「あげる」や「もらう」とは別に自己の視点を投影した「くれる」という動詞を持っており、自己中心的な出来事の描き方をすることとも知られている(松下1992:8、久野1978)。

(9) 「テストイモ」とは、口紅の商品名である。

(10)

ネット上に様々な掲示板を設置するようなサービスでは、一つ一つの掲示板のことを「スレッド」という。サーバーの負担を減らすため、現在は1スレッドあたり最大1000件まで（もしくはデータ容量50KBまで）書き込みが可能であるが、そのような制限が無かった初期には、10000件を超える書き込みがされたスレッドもあった。

(11)

ただし、これらのスレッドは、第一件目の書き込みが1999年、2004年、2009年にそれぞれ行われたというだけのことであり、スレッド内の書き込みが全て当該年のものとは限らない。実際には翌年（ごくまれに翌々年）の書き込みも混じっているのだが、スレッド内にある膨大な書き込みデータから、特定の年の書き込みだけを抽出・分割するには膨大な時間が必要となるため、今回は敢えてそのまま使用した。

（おだに まさのり・本学教授）

編集後記

▼当初の予定では、本誌『日本文学誌要』一〇二号は、二〇二〇年七月に刊行し、国文学会大会で皆様にお渡しできるはずでした。しかし、今年は、新型コロナウイルスの影響で、大学が入構禁止となり、専任教員も助手も出勤停止となり、さらには、印刷業者とその関連会社が休業するなど、あらゆる活動がフリーズ状態となったため、『日本文学誌要』『法政文芸』の編集作業・発送作業をストップせざるを得なくなりました。

▼右のような事情で、本誌『日本文学誌要』一〇二号と、『法政文芸』一六号は、例年に比べほぼ半年遅れの刊行・発送となります。会員の皆様にはご理解たまわりたくお願い申し上げます。

▼その他にも、今年は、卒業生を励ます会（卒業祝賀会）も、新入生歓迎会も、国文学会大会も総会も、教員のつどいも、中止となりました。これらのイベントを来年に復活できるか否かは、いまだ不透明な状況にあります。それぞれの実施時

期・実施形態などを、柔軟に変えてゆかなければならないかも知れません。

▼現時点（二〇二〇年一月一日）では、日本文学科の授業・日本文学専攻の授業は、オンラインで実施されています（インターネットによる教材・動画の配信、ZOOMを使った遠隔授業）。つまり、日本文学科の1年生と、日本文学専攻の1年生は、まだ一度も、教室で授業を受けたことも無く、先生に会ったことも無く、友人と会食したことも無い、という状態なのです。さて、このような時、法政大学国文学会は、何をすべきなのでしょう。何をすべきでないのでしょうか。

* * *

▼日本文学科共同研究室助手を務めてくださった藤井輝さんが、二〇二〇年三月末を以て退任されました。三年間どうもありがとうございました！そして、二〇二〇年四月より、関口雄士さんが、日本文学科共同研究室助手として着任されました。着任早々、非常事態となり、ご苦勞をおかけしています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

（加藤昌嘉）

二〇二〇年二月一〇日 発行

日本文学誌要 第一〇二号

編集部 加藤 昌 嘉

遠 藤 星 希

発行人 勝 又 浩

発行所 法政大学国文学会

〒一〇二―八一六〇

東京都千代田区富士見二・一七・一

法政大学八〇年館

☎〇三（三三六四）九七五二

口座番号〇〇一六〇―七―六九四三

印刷・製本・版下制作

岩城印刷株式会社

東京都板橋区板橋一・一二・九

☎〇三（三五七九）〇〇〇六